里見八犬傳　第九輯　十二之十四

特
イ曽4
600
256

イ4
600
256
特

曲亭翁編輯

里見八犬傳第九輯

本輯下帙之上
丁酉孟陽續出

柳川重信畫

小傳馬第三坊
文溪書肆精刊

南總里見八犬傳第九輯下帙之上附言

有人云在昔里見氏の安房を起りて後を上總を略し又下總をも半分討從さ兄有
低び安房の小國なれども其發迹一地なるとりて今も世の人推並て安房の里見とふ
然るを更に這書に名つけて南總里見とも便是本を捨て只その末を取るに似さ故あ
いふぞや。と詰問れに予答て云古子が今論ぎるに後の稱呼に從ふに上れる代の制度を考
るに安房の素是總國の郡名なり巍古天富命更求沃壤分阿波齋部率
往東土播殖麻穀好麻所生故謂之總國上總下總二國是也
阿波忌部所居便名安房郡今安房一國是也と古語拾遺に云ふ古事記並に書紀
景行紀に東の淡水門を定めたまふと云ふ宜景行五十三年冬十月天皇上總國に到
たまふ淡水門を渡りたまふとあるに元正天皇の養老二年五月乙未上總國を
は平群安房朝夷長狹四郡を割て安房國を置たまふ聖武天皇の天平十二年十二

月丙戌安房國と元のごとく上總國を并せ治めかくて孝謙天皇の天平寶字元年五月乙卯安房國舊に依て分立ちるよりて書紀及續紀をたゞしく見るに後い安房と上總と二國なる論あり。さるに安房も初い總國へ當時里見氏の威德を思料るに人相似てその封域をいふ者二百二十七萬石とも房總志料第五卷安房の附録に是を不ロ〻里見九代記に據るに里見の領地い義堯より義弘へ代〻所安房上總並に下總半國是に加るに三浦四十餘郷あり此彼を合しても七十萬石に尚充ざるに土人の口碑に傳る所い何ぞ本つゞくに依ていふ縱七十萬石に充ずとも大諸侯と稱するに足れば然れば起本の國とふもかくの如く小說に編小の安房とりて里見の二字に冠せべくに必りとそ又房總と倡るべき三浦四十餘郷あり因て南總とふとそいその地廣大に相聞えそ唯上總のみに限るに這書に載る里見父子い賢明當時に雙れい南方藩屏第一の大諸侯とふと看官のものいせんとも作者の用意素よりかくの如し知ぜ僻言るゝんかも。

本傳第九輯い初の腹稿より巻の數いとヨヽくるとりて第九十二回より第百三回まぐの六巻と九輯の上帙とし第百四回より第百十五回までの七巻と中帙の上下とし今板第百十六回より第百二十五回までの五巻と下帙の上とも是より下も尚物語ヨヽくれば亦復十巻を両箇に整て下帙の中下帙の下として明年二度に續出べし。八犬士及八犬女の端像俗に是を口画と云い第二輯三輯より冉々に是を出して今ハ遂漏なしといへども或い総角の折の姿を寫し或い微賤の折の趣ゆくゆまぐ其真面目と見るに足られば今又あり是を出せり。去るに惟伏姫い生前死後の神體まで曩に端像に出るべ茲い省ぬ。七犬女と重出もそ中に濱路沼蘭雛衣い既に鬼籍に入られいその墨色と異ふまで綉像同じからぬ也又彼神女の賛詞の如く琴籟君子の麗藻あり因て、大と賛する五絶と倶に亦簡端の餘紙に録す

天保七年丙申秋九月下澣立冬後の一日　蓑笠漁隱識

南總里見八犬傳第九輯下套上摠目録 九集 第三版

巻第十三之四

第百十六回 賢士重知犬士を政木肇詳政木

第百十七回 答恩化龍示升天問津犬童悩風濤

巻第十五

第百十八回 兩國河原南客逢北人千千三畷師弟屠蕃嬬

第百十九回 説來路次團太附驥尾盡餘談親兵衛促扁舟

巻第

第百二十回 傳命令使臣征伐膚一葉窮士償前愆

十六

第百廿一回 天資神祐辟石門牢戸犬江親兵衛破魔夷賊

巻第十七

第百廿二回 讓勲功親兵衛赴法會後賞禄安房侯温寒郷

第百廿三回 小兼樓一僕謁故主大庵十僧資法筵

巻第十八

第百廿四回 守師命星額齎遺骨受殘捨腐僧告禍鬼

第百廿五回 逸疋寺德用與二三士謀退職院未得名詮諫不得

八犬傳第九輯下套上目録終 下套中下二帙陸續刊行

磨劍不忘親寛仁王
佐器堂堂好男子到
處伏蛾吏
賛犬塚戌孝
寒蟬懸蜘網新月落
圓陵叟託同名女貞
蒐結赤縄
賛濱路
前後両濱路
犬塚戌孝

幼稚養村荘義心凌毒手在泥不染
泥市上糶人口　賛犬川義任
依義失雙實
逢霊全両英
誰知仙境住
花樹受恩栄
賛音音
音音
犬川義任

赳赳忠義子積年凌百憂
英風誰敢敵一箭貫金兜
變姿知幾處智勇最
冠州牛閣返重恨鈴
森討久讐　賛犬山
忠與犬阪亂智
犬山忠與
犬阪亂智

犬飼信道
劍法阪東一勇威
不可當拾骸庚申
嶺補孝赤嵒郷
賛犬飼信道
一時離而羽恩恵
六年間歡喜且憂
苦共維倚富山
賛妙真
戸山妙真

沼蘭
一拳撲野豬雙手
駐物拚謙遜不曾
誇其名轟世界
贊犬田悌順
心血成良藥眼前救一雄悲風花落
處不料得神童　贊沼蘭
犬田悌順

駄馬倒山路姉妹咫尺間
若非神妙助爭得到仙寰
又
仙山逢舅姑夜
徑見亡夫姉妹
依神助相俱詣
鳳雛
曳手
ひくて
單節
ひとよ
十條力三郎
十條八八

犬村礼儀
いぬむらまさのり
壁返黙摩居
遺刀刺怪獣
有文有武威
誰又出其右
賛犬村禮儀
雛衣
ひるがぬ
一朝遇謗疑薄命無由救
伏剣顯貞心走珠殲猛獣
賛雛衣
仰信阿

及時開左手
神助免危窮
六歳富山住
幼拳救老侯
賛犬江仁
犬江仁
いぬえまさ夫

鍾勲從猛將五湖滿羅裳花
乱富山雨落英薫八方　賛里見伏姫
獵銃弗成章法衣長遯俗歴
遊二十年終繼八剣玉　賛大法師
右拙賛一十七首叨題幸輝簡端以
歎於四方君子雅鑒

琴嶺蟬史

南總里見八犬傳第九輯巻十三之十四

東都　曲亭主人編次

第百十六回　賢士重く犬士を知る　政木肇て政木を詳ゆ

再説犬江親兵衛仁は尺ゆも足らぬ鐵扇をとりて河鯉佐太郎孝嗣が最も劇しく毆ち双尖を受流し相拄えて挑戰ふ至妙の武藝ふ孝嗣秘術を盡せども毫も透を得ざりしが憶ずも聲を被て忽ち少年姑且ばらく問ふことありと叫びて身を跳らして圍を絶の外へ退き喘定めて刃を鞘ふ斂まば親兵衛莞爾とうち笑て思ふ優る和殿の大刀筋何ぞ雄を決せざると問へされば此方よ刃和殿の為体人を揣りて貨財を奪ふ騙児なれば必是向馬前刀徑を事とせる又那麻生の松孺の亞流なんとおのれとりて毆る果さまく欲せ不旗力凡庸なるもを矢庭ふ我身を撥抓て投石ふ今一支の勢に世ふ少えなる村上義

光妻鹿孫三郎とそ。いふ〻く及ぶ。加旃武藝精妙絶倫。數すの扇子とりそ。我大刀風を扇ぶ返す。神術奇特の業。上ふ奇ぶ和殿の懐より。一道の光明赫赫火と閃出て散徹く。只我眼を遮り。かばひと朽惜くも腕児狂ひく。大刀筋安定るゝ。ぶれば心驚ぶ訝しふ。恁ハ刃と歌めゝ。意ふ和殿ハ人倫を。鬻ふ我死を救ひぬる。能の刀身の等類彼權者の化現欤狐狸妖怪欤惑ひと解ぶ甚麼ぞと。問へば親兵衛うち頷ぶく。その疑い然ぶ。酒家い妖怪変化ゝも。実を諦せば和殿ふ等しぶ窮達不定の孤客。這頭と遊歴まゝるのゝ。我名ハいまゞ呼れぶ。酒家い和殿が相識まる。毛野道節們の七犬士と。同因果の義兄弟。犬江親兵衛仁と。唱ふ做ぶ。今茲九歳の総角ぶれとも。童年才ふ四の秋より。伏姫神の權護ふより。安房ぶ富山の神嵩山嶽ふ。人と成りふ甲非あり。心術さへ身長さへ。見ゝる〻。像く大人備く。文学武藝も。姫神ふ倣授せられく。然ばりの。本事ぶふあゝぶれば。料ふもものぶふ比世ふ復出べぶ時を。沿く。國主御父子の奉為ふ。寇と夷げ敵と降ゝ。その功とりく。寵用せら

まゝ。上總ふ舘山の城をそぶ。隨預けられ。ふ故ある事ふ。幾日もあゝ。君のあん覚妙ふ。自餘の犬士の在処と。索ふく。一個も送ふく。領て来よとく。猛可ふ身の暇を賜ふ。我も亦同因果の義兄弟ふ。先ゝ。ちく。單國主ふ仕ふ。本意ふ。ぶとのゝ思ひ。ぶ一談ふ及ぶ。領掌まう。ふく。伴當ゝぶ一個も。俱せず。投方へとそ。赴く程ふ。則一日の旅ふ。ぶけふ。も這頭へ来ふ。れば。衢ふ上野の松蔭ふ。茶店ふ。一憩時立寄て。路の疲労を。憩へさ。あり。ふ里人ふ。ぶ。群立走ゝ。前面岡ふく。頭を。擡ふ。那罪人をふく。見んとそ。慌ふく。相罵ふ。ふ。ふ。ふ。思ひ。ふ。茶店の老媼ふ所以と。問ふ。ふ老媼の答ふ詳ふく。刃忍岡ふ。城内の機密ふ。送ふ。告られけり。然らぬ。酒家富山ふく。伏姫神の示現ふ。ふり。和殿親子の忠誠孝義と。ふ知ふ。ふ。汚さ。ふ。今又老温ふ。ふ。ふく。具ふ。ふ。酒家悄地ふ思ふ。那孝嗣ふ忠孝ふ。嵩表ふ高暇の對陣ふ。道節毛野們感嘆。ふ。刃と。交ぶ相別れ。ふと。偽ふ。ふ。慨ふ。ふ。佞人們ふ誣ら。ふ。罪ふ。ふ。罪ふ命と。殞ふ。ふ。憐むふ猶餘り。ふ。非如我這身ひとふく。其死と。拯ふ。沿

かくても切く首級を奪ふく選佛場へ葬らんも亦武士の情ゆえと尋思とあく遠
あく。そゞ儘茶店と立去るく。前面岡ゆ来く相まバ既ゆ刑伐の折と覚くて和殿と布草の
うへ。ひきすゑ。ゆくり。上ゆ牽居さる。そゞ身邊ゆ実検使あり。竝ゆ大刀含の武士もあり。他們い老媼ゆ知
なる。刃心岡の城の頭人根角谷中二丽麗廉と。穴栗専作ゑべ。と猜せるゑの餘幾十
個の雑兵四下と守護く。専非常と敬言ゑる。後方い連る岡ゆく。樹柱隙ゑ。戊午
あくねバ。件の樹蔭ゆ身を潜し。事の容子を偷看在りゆ。覿目不樂ゆ和殿の終
焉。白刃既ゆ頭上ゆ莅めバ。胸い裏ゆ胆冷て極る術もゑゆ折くゑ。幸ゆゑくゑ越路ゆゑ長
尾家の老夫人當所へ發向の竹えあり。ゆく轎子と寄られて遂ゆ和殿を救い含ゑゆ。
理非明辨のゑ談精妙。驚奇雀躍愉快の光景ゆくゆ時宜ゆゑりくゑ麁廉
們い感退ゆ去りて。那大刀自い両刀を和殿ゆ含くくゆ。と覿い怪や幻也。其里ゆ在
まる籠大刀自最ヨヨくけ。伴當さへ瞬息間ゆ在くゆ。事の奇瑰ゆ身潰

まく。ゆ。ゆ。ゆ。窃覿ゆ和殿も酷く驚ゆ。倭と単語く。且浅草の方へとく。
快立去まくせくれ程ゆ洒家悄地ゆ思ゆ。那孝嗣い智勇の健雄。毛野道節們
と相識まる。親子の忠誠。その甲斐ゆく。僅ゆ死罪と免れて萍跡浮浪の人とゆくくと。
我君侯ゆ薦めまくく。里見の家臣ゆ做まくゑ。萬卒ゆ倍く憑くかくんゑ。ゑまくゑ
ゆまくゑ本事と知らゑ。錐くくと尋思とあく。和殿ゆ先ゑ。間道ゆ悄地ゆ走りて
這里ゆ在り。像の如くゆ計較く。聊試くたりけゑゆ。倘九庸の浪人ゑくゑ。我懐ゑる
財嚢と相く。正ゑ心を發ゑゑ。一所不住の浮浪の其身ゆ。鐚一文の盤纏ゑ
けれど。然ゑとゆい。揖念せゑ。洒家ゑ。路ゆ倒れゑる。病者ゑくんと憐ゑ思ひて。喚活ゑ
ゑ。届くゑ。介保せんとくゑを。揖られ。清白仁慈の心操君子ゑりくと知るゑくくゑ。武
藝の利鈍を。榜らん為ゆ。陽瞋ゑくゑを。下ゑゆ。投られゑくくゑ。跌ゑ倒れゑ。ゑ。刃を抜
見めくくと。毀ゑ果さんとく。挑きける。大刀筋都く。法ゆ。稱ひて。一人當千のゑ段ゑゑゆ

あゝ武藝の程を知る上ハ里見殿へ汲引せん。外を求るとゝハと意衷を告て慰れば。孝嗣深く感佩し。終ニ天くるゝ聲を悄めて原来和殿ハ大阪付那七勇士と宿因ある大江生でありけるゝ那人々ハ義兄弟八名ありと呼ばかど高畷の對陣ハ大塚生もゝ虧れ和殿の上ハ少知らぎりしハ神の擁護ハ霊山ハて生云月ゆゑと守く間ハ思ひ合る奇特ハ覿面今茲九歳の総角ゝと誰ゝ知るゝ身長さへ心術さへ大人備て智略勇力武藝まで現神々ゝ集傑今昔ゝ雙とゝらゝゝ神霊偕授の大刀筋ゝゝ敵ハ如ゝ然ゝ方僅刃と合せ折奇ゝ紀ハ和殿の懐より光を發ち粲然と我面を撻ける八必是所以あるべゝと親兵衛ゝ聞ゝ疑ひも解易ゝ我黨ゝ八犬士ハ自然と獲ゝ靈玉ありその八顆の玉毎ハ仁義礼智忠信孝悌這八行の文一字ゝあり天造地作の室貝ハあれ庵を釋ゝ難言を征ゝ第一の身の衛ゝれハ優ゝるゝ所ゝ就中我持る玉ハ仁の一字あり。仁と名告るゝこれハ由れり暴裏ハ富山ゝ

折獨館山の城ハ赴ゝ逆將蟇田素藤を生拘ゝ凶徒を降し城を拔ゝも我靈玉の威德ハよれり。偖れば和殿と桃ゝ折ハ自然と光を發ちゝ遮莫館山の城ゝあゝ那兇黨ハ降伏の為体を告ハまゝ追ゝ言詳ゝ告れば。ゝゝ沼ゝゝゝ思ハれゝ又只我上のゝゝ七大士ハ才幹言行安房侯老侯御父子の明德賢を愛民を撫善政隈ゝ施ゝ賢君良佐の事の崖略伏姫神の霊驗威德の世ハ復沼ゝ紀奇談まで鮮ハさまゝ思へども這里ハ久恋の園ハ思ゝ卒ゝ上野の原ゝ退て送ハ意衷を盡べし。とハハ孝嗣再説ハ覃ゝ現ハゝれゝその理あり物蔭ゝ紀這池畔ハく長譚ハ時を移さば谷中二ハ稍醒く立かへ来ば爭何ハせん非如そのゝゝ刃心岡へゝ遠ゝ一歩も快退くゝ上策とまゝ紀のゝ卒さくゝゝ連立く上野の原ハ来ハけれ親兵衛遥ハ指して河鯉生よ。那アゝ那老松を片食りく建ゝ殷賞を折遠ゝゝ鄙ハ我憩ひゝ老媼の茶店で休ゝ爲和殿の身の皮ハ囚牢衣ゝ去自の

外視宜かくぞ今日ハ殊ゆ温暖なれバ我下衣ハ一箇脱て。裹て腰に纏るあり。且
那里へ立よりて茶をまゐらせん被ハなどとふを孝嗣ハきゝへつゝ。そハ又ぬくゝし好意なり。
知己の隨意せざらんやと欣び答く共侶に件の茶店に来つゝ見れバ窓の蒼柴烟ハ立
ども何地ゆきけん老嫗ハ在らず然バとて茲より外に亦憩ふべき家ハなし。一霎時等するに
かへり来てんと思へバ両個の後生ハそが儘裏面に入る折ふるゆも薩簀を掖遶らして外
視を悍る目棙にあり。倶に茶を汲ミうち喫く。親兵衛ハ腰に附る袱裹をうち被きて。
衣を合せて孝嗣子卒しそ遮與せバ孝嗣ハ受合するうち戴きて。手ず上下襲被く。身
装をあらためども。かの老嫗のまだ還らねバそが儘発兒に尻を掛て。親兵衛と倶に憩ひて
在り。登時犬江親兵衛ハ孝嗣にうち向ひて。嚮に話し漏したる。その身の禍福伏姫神の冥
助撫育并に姥雪老夫婦曳手単節母子の事及七犬士の事の趣ハ畧表に姫神に告
られて。聴にし随に一事も省かず且里見殿父子の賢明四家老諸勇臣の行状得失

素藤が叛逆の顛末まで。その要を演繁と箇様々々と悄語示せバ。孝嗣ハ
聴毎に連りて感嘆の聲を絶断ず憶ずも太息を吻く。適愛なる諸犬士の孝義英
才始ハ在下。君父の與る大阪生を恨みしにその僻事ぞと悟りしより更に捨がたき恩ひあり。
矧今又その義兄弟犬江和殿に邂逅して。その身の資助になるもの過世ありて欲定に奇
なり倭まゐ八個うち揃ぬる倖門傑達する宿縁ありて。君臣の義を結バせたまへる里見殿両
侯の年来の徳澤仁政聴くごとに名将なるかなと羨むべし。うらやむ㒵しと只管嘆賞まで在れバ。
親兵衛ハ且その聲を悄めて。郷間ゆも既に云ひけらし。我君侯ハ賢を招き士に下りのみならず老
殿のおん時より蟇崎十一郎照文と喚做せる家臣を関八州へ遣して智勇全備の士を索く
招しなひしその折犬塚犬飼犬田ハ下総なる行徳にて。ゝ大法師と十一郎に思ひかけず相遇て。
里見殿の息女なりける伏姫上ハ犬士の與る過世の母にてとゆたりと料ずも曉得る首をいへバ億々
なりそ八房の犬の事。金碗入道ゝ大の事及親兵衛が二親の義侠横死の事までも詞急迫

孝嗣も感嘆して。咱們扇谷家に在り一日も奸黨に仇と忘れて一個も知音の友なるーに高畧の軍陣を。大阪大山西勇士の意表と始く听ーより。寃家なるも心に似ず。知己へけりと思ひーに今又和殿の話説を。凡人なる人を知るに足れり。その水原と聚れば姫神孝義の英烈より。自然と生れる八個の豪傑里見に出て里見に仕る。宿因寔に羨むべし。安房い四郡に過ぎれども。偉なる形造化の妙功八顆の靈王八個の良臣身を護り君を補佐して武威八方に赫奕ん久後まで。ものと憑ー感心の外に。ものと繰返ー感心の誠を親兵衛さまと慰めて。徒思れる。他を求め結里見殿に仕へ。酒家一尺の書とまわらせ。和殿と薦めまうーに。必登用せーるべ。安房へ赴くべーといへば孝嗣沈吟して。そは奏るべき。非如不德の君なれば。扇谷家に父祖の時より恩顧重代の主君なるーに。今日死刑と免れうとせば。他姓に仕へん。忍びがたし所あり。願は和殿の従者と做して。その投くに伴れ大阪大山自餘七個の大士達に對面ーく。和殿と倶に那人々の安房に参りて仕る後まで幸ひして。棄られ我身吹舉に預ーべそと左も右も杳意に依ーん。目今に従ひ。と答る折ー。蹙然と這方と投て来る者あり。此は是別人なるーぞ。這茶店の老媼なるければ。孝嗣が引続ーて。茶筅と起そ。推啓して找入ーて親兵衛に見。合笑と揖讓して。郎君前面岡より剛才かへ来ませー。狹奴家に所要のあるに喚れて。宿所へ走り来ー程。店ちに空く。ーに好とそ。せゆ。たれか連さるも茶と召れー。狹先沸らーてまわーせん。とひーく吹角。食抗て埋火搔て吹起せば。電木の煙立外る。雲雨の離邑に白菊の衰ひ易き風情なる。老媼と孝嗣をくーと相々。親兵衛が袂を按て。大江主那と。えのーぞや。那老媼が面影い。鄙に我が必死と救ひ。假大刀自ふ。肖なる倘その人に。ーぞと。とち耳に。指さーに示せば。親兵衛も稍心ぞく。現なるれば聲音も。毫も錯ーぞ。寔に似ーり。故なーぞと。奇と。潛詰く。聲耳の。ふけ。老温い。徐に。ーりく。力。徐達さまでに訝りのふる前面岡に。河鯉王の危命と。拯合ーり。別人なるーば。奴家に。とふ。孝嗣も親兵衛も。胸を潰ーつ。そいと。ぞる。呆れて。ふも長視て在り。と。老媼いさそと。微笑く。

犬江主ハけ遭際の初對面で侍る間知らせの為い理り乙河鯉腹子い名ざりたも听知りてさぞ奴家い政木で侍るか。と名告れど孝嗣ゑ為ぬ作麽政木ゑ誰ぞゑんと訝り問へ様近つ発児ホ尻ゑとち様て原来忘れぬ。ひ狡然ゑ具ホ告まゑゑん犬江主も听ゆ様嘴和子。思ひ出ゆゑ奴家い乙身の後の姉母後の政木で侍るか。とふふ孝嗣ゑ為く悟て原来我ゑ総角の比大人の夜話ホ侍ゆる故ゑ影と躰ゑ姉母政木い你狡ゑ多く什麽思ひ付ゑ再會ゑ乙とふホ訝る親兵衛い我姓名と知れる。ゑも亦奇と云ふ口と鉗て听ゑ乙ゑ當下政木ゑ点頭ゑ又孝嗣ゑ向ふ。ゑよ嘴和子這回奴家ゑ乙身と救ひ事の情と今ゆゑホ説明さへ恥ゑく面る乙所ゑで侍れども乙身の未生以前より奴家い恐圄の城内ホ牝牡栖馴る野狐と云ホ乙身の年二才の比奴家い有身侍りしとあり。ゑ乙ホ乙身の父ゑ權佐守如大人い素より忠義の士ゆ。當時恐圄の城預の頭人で侍ゑ。那城内ホ在ゑ。又乙身の奴ゑも慈悲深く物を憐む本性ゑれば。と憑ゑく思ホ間奴家牝牡いその家ホ寓来て筐ゑ子の下ホ栖れと人ホ見

られぎ知れもせば奴家い开里ゑ子と産ゑ。その時又河鯉ゑ家の若黨ホ様田和奈三と唤做ゑり。その性酷く残忍ゆ。殺生と好ゑり。ホの年乙身の父ゑ守如大人い君命ゑより京都將軍家へ乙使ホ立ゑ。ひ那和奈三い政木と唤做ゑ。乙身の姉母と幾の間ホ狡密通ゑ。ゑ乙ホ病ホ推けて主の伴ホ立ざ乙ホ程ゑ我雄狐い奴家ゑ與ホ食物と求ホ夜々外ホ出ホ有一日件の和奈三い釣漁の地龍と空弁舎ゑ。心ともゑく庭ホ印ホ狐の足跡と見出ゑ。這足跡い猫ゑり大ゑく。狗ゑり小ゑ。這頭ゑ狐の穴ゑく。开ゑ通ゑ路ホ在ゑんぞゑゑ。と尋思と考ゑ。その日の夕狡鼠と麻油ゑ熬ゑ。甲夜ゑり庭ホ弥を様けホ我雄狐これを相て弥と舐ゑけゑ。知ゑゑ。畜生の悲ゑ。その香ホ被ゑ心惑ひ。慾を禁ゑと要ゑ。終ゆ弥ゑ様られゑ。命と开里ゑ頑ゑけゑ。ホ程ホ様田和奈三い揣ゑ。ゑく狐と舎ゑ獲て。その穴ゑ内ゑ。皮を售れども乙身飽ゑ。狐の穴のあべと。悄々ホ求猟ゑ程ホ我子狐の穴ホ在ゑて鳴聲を洩ゑて原来ホの簀子の下ホ栖ゑ狐の穴ホ在ゑけゑ。猟出ゑく射て食らんと。罵り噪ぎて准

備を設るとあん身の奴々の少知りゆひくうち牧馬沙々和奈三を召よせてよと問のくを和奈
二悪きことをなぞいふる夜庭ふ弥を措て箕子の下ふ栖ひ居る牡狐を捉獲る支の趣を
招きければ奴々いひく腹立ゆひてそを軽く奴曲事之我良人ハ性とて慈善を旨とー
ゆへハ最小き虫之とても故ふく殺ーゆふとあく況当所の鎮守の神い妻恋稲荷を御
座せば狐ハ要ある獣之且その狐を捉りー宵ハ河鯉氏の先祖の忌日の逮夜ふも丁寧ふ箕
子の下ふ栖る狐のありと知りて主ふ告げ徳恣る殺生い言語同断とのひつべ折々我良人を
京上りの留守をふ一家児を僕従のける不逆支を考と禀さば家を守る我怠慢ぞと発
憤らせあいん侍る烏許の没黒児ハ今よりの後使ひくかりー大父耶のかへせの日まで速ふ下
宿して慎く沙汰を待べと思ふの隨ふ叱り懲ーて子舎ふ退け屏居らーく和奈三ば保人
某甲を召来て仔細を示して那身を預け遣ーゆふ恁りー程ふあん身の奴々ハ奴家母
子を憐みゆひて這城内ゆハ岡もあり林もあるふその狐の牝牡之の家の箕子の下ふ栖ひ所

以ふ牡狐ハ幽憩の人のふふ撃られく可惜命を殞ーたり牡狐ハ子を養
ふよさぞる便りく哀ーらめ日毎ふ食を與へよとく心術素直る奴婢ふ恁々と吩咐く或ハ
餅赤豆飯油熬ハの豆腐鱚魚ゑゝどを箕子の下ふ措ーゆひて旦夕ふ賜ひーば奴家ハ夜ゑく
外ハ出て求食るふ及ばを飽まで乳汁も卓散んければ子と養ふ便りを為るも皆是奴々の
御恩ふ侍れば之茶く思ふゆも恨ゆ之ハ只和奈三のみ然れども他ハ心猛く残忍至慙の暴
男ゑれぞ食渇く命を果さん術を施ぞくもゑゝぎ誰何せまーと思ひ不娯々四五十日を歴ふ
程ふ守如大人ハ恙ゑく華夏よりかへりまーて返命をまうーゆひあん身の奴々ハあの折ふ
樹田和奈三ば事の趣を守如大人ふ報ゆひーば大人ハ听々點頭く和奈三ハ譜第ふあ
らぞその心術良くれば身の暇と取ーせんと思ひく為果さぞ惜ひべ者ゑゝぞとく預置
せ和奈三ば保人を召よせく家風ふ背ひ他ば越度と恁々と呼え知らーて那身の暇と
取らーゆひ恁而又日数を歴く我子ハ既ふ乳を離れて稍大ぶくるりーば他の野山へ遣

政木の老媼が
懺悔話説
和奈三政木
夜剪徑子
諺さん

あるく。身単故の究ふ在り。恁り程ふ和奈三、主家ふ在るぞるりーより。ゑ月情慾のる方ゑけれ。悄地ふ政木ふ艶翰をなりく。諜ー合ふ夜ふ紛るそ。誘引せて走るふけり。朋輩の奴婢們ぞふ开ゑ知れるのゑりーふ奴家なるふ豫より恁らんよりと猜ーたり。這時慾ゑ復さむい孰の時を期せべ。と思へ當晩和奈三と政木が迹を跟て行ーふ千住より去向遠く竹塚の邊ふ和奈三が乾小父の莊客あり。那里を憑ゑく姑且の身の躯然ふもべーとて。开方を投くいそぐ。を奴家途ふく迷ーく。瀧野川村へ掖て来つ左右間ゑ細路を奴家ハ剪徑の山豪ふ化て他們が前後より両個とゑ立顯れ盤纏を遮與せと喝被ゑ々引拔ゑ諕ゑ刀の光ふ和奈三政木ハ吐嗟と叫び。路を討めく逃んとーくる。歩下暗ふ小篠原折ゑ月ハ雲ふ没て黒白を別奴男女ハとく急流名高る石神川の岸踏崩ー滾落く。浮ハ沈ゑ流れーが俱ふ溺れて死ふけり。恁てを奴家ハ月屬の然を復ゑを。と思ゑく。心ふ快ゑりーかとも政木が在ぞゑりーとゑ。生ーゑ妬母を隷ーまるべ和子ハ必面嫌ひて。その

乳を輒く喫ゑハ。然ゑべ和子の父孃の心苦ーくゑぞく。是より五朔の病ゑを。引も出さべ爭何ハせん。和子の奶々のゑん好意を我子ハ安く生育ーふ今その報をせぞもあゑ恩を思ゑ母のふ似ゑり子母ハ大ゑうゑりーかを。乳汁ハ今ゑ月餘滴あゑく。緻れべヨヌく出るか。今宵政木が逐電せーを人の知ゑぬを幸ゑ。ゑれせん術あり。と孕思ーく。その曉天ふ必岡の城内ふかゑ來く政木ふ変ーく。和子の臥蓐ふ添乳をゑつ臥ーたりけれ。東人御夫婦いへ。ゑり一家兒の奴婢們誰もかも。政木が逐電ゑると知ゑぞ。況和奈三と共侶ふ石神川ふ滾落て。底の水屑ふゑりふよりと後まで生ゑるのゑけれ。奴家を真の政木ふあゑぞと知るのゑ絶てゑりけり。恁而ゑの次の年。ゑん身の奶々ハ血塊の病着重りく臥ーゆーより。鍼灸茶餌の效驗るく約莫半稔有餘ふく。竟ふ身故りぬ。ゑ奶々亡るりゑーより。和子ハいゑく奴家を墓ふく離れゑぞ。放ちもせぞ恩愛既ふ庸常ゑ。れ我実子の思ひと做ーく。守宇むと又一稔有餘和子の五才ふゑりゑける夏の日のゑりゑ南向の小坐席ふ奴家ハ和子ふ添乳をゑ

た。寝るとも知らぬ假寝せし折。和子は單覚めて。怜悧や稚心にも。我面影の異しを。怪しと思ひ。けん次の間に在しる。夫人を連て。喚立て。爭々よ是腐せ波女々が顔に狗児に做り給へ。変化せ。よ噛々と喚る。聲の奴家が宿耳に入りしが。駭て覚て一霎時も堪ぬ。鈍まし。我は我。本形と顕しけり。思へば。俄庭門より。走去りて。竟に還らざりしかども。別の悲に。けふ日の暮るまで前栽の。樹蔭に躲れて。泣く在り。守如大人も。件の奇異を。聞しかば。数馬は怪しみ。上大人。原来政木の野狐なりしとの。年来知ずして。我子と。字育せしを悔あけれども。ゆゑ。人知れぬ。武士なるものが。畜生の。乳とりて。その子を育けり。とられんは此上なき羞なり。秘よ。口外せべ。と。奴婢們を。堅く。警めて。その明の日に政木が。保人某を。召よせて。昨日政木は。逐電なり。然とて。另に犯せる。幸なる。往方を。索て見よ。と。言ひて。その。餘の。奴婢に。及れば。和子は。五才ばかりなる。妹母なる。我子の。與られしとて。人。薦れども。後妻を。娶らず。鰥夫で在しより。程なく。年七冬。奥隷の。

老黨某。丙病死しければ。扇谷殿守如。と。く。開ず。迹役。成しめ。是。より。守如大人は。五十子の城に召れて。那首に。移り住。奴家は。悄々。和子を見。欲。る。路近。ねば。思ふ。儘。ぜ。不娛。き。涯。り。ば。忍岡を立去りて。上野の原に。獨居り。その時。奴家は。身は。幸。に。命長く。そ。數百年を。歴れども。靈狐。なる。功徳。なれば。通力も。亦。疎。く。牡は。殘忍の人。は。殺され。我は。幾程。ならず。して。その。死。を。復。も。折。謂。たるのみ。と。下。ば。和奈三政木。と。害せしは。遮莫。不良の人。も。世に。萬物の。靈。と。いふ。身は。畜生。ぞ。仇と。謀。く。賸。死地に。陷れし。人。畜。尊卑の。差別を。思ふ。對。応の。義。を。ものの。我。衣。ざ。んや。然。は。神。も。佛。も。憎。ば。我。身。は。天の。寘。罰。怕。ず。慈。で。罪。障。重。ければ。今。より。幾。層の。功徳。を。積。く。世の。為。又。人の。與。に。慈。善。を。上。と。せ。ば。わ。が。志願。成就の。日。あ。と。深。念の。臍。と。固。め。ば。け。ば。這。上野の。原。に。昔。より。て。人。雄。ば。出。茶屋。を。ど。の。ま。と。ば。れ。三伏の。最熱。に。日。又。玄冬の。寒。に。時。に。旅客。寒。暑。に。堪。難。て。死。に。至。る。の。ま。ば。ま。ば。

故に奴家が老媼が妻まりく這里に茶店を置て往復の人の便りに汲まるゝ年来の為に
けり然れば日毎に獲る茶銭にて乞児或は寒民の餓えを施す又這頭の溝壑に朽損
ねるを見れば奴家悄地に獨水を架て人の便宜をせざるまく或は男女の情死を制の意
見を加へ慈を諭して故へ收めしも甚しく或は困窮至極して縊れんと欲する者身を淵川に投
んとするを救ふく錢を取らずして且生活の便宜副論えく宅養して養せしに憂を轉じく
歡びと做すもヨリく伝りて狐奴家が這陰徳を思ひ起したるの日より今に迫て二十許年
人の必死を救ひ〻九百九十九名に伝りたるの義天意に稱ひ故に身毛年々に白くなりて
清冷と雪の像く尾も亦裂く九尾に成り世の人九尾の狐と呼び近世の似而非物語玉藻前の
事とて皆悪狐とのみ思はれど所詮其一元訛舛なり九尾の狐は神獣又九尾狐と稱せり瑞
應編に明文あり段成式が酉陽雜俎に天狐とのみも九尾あり日月宮に来往して陰陽
洞達して千里外の事を知る天眼通を得るものゝ奴家も修行の功徳に因て稍その數に入

るゆゑ白毛九尾の形を備へ天眼通を得たりしに五十子の城に在もの身の參々守如大
人今茲正月廿一日に免れ〻尼あり折奴家その義を知るをもて救いまゝ思ひ命
數既に盡りある定業なるを爭何せん本意なるぞとの事なれども不媒に又あの身さへ好黨の毒
悪詰詐中られて寃屈の罪に死を促れ白刃頭に位に至れり今日我和子の死を救ひく奶
奶の慈恩に報ひ始めく終なく年来做あ一我陰徳の空あるべしと尋思まり這
頭に三〻眷屬の野狐を召聚合て計畧を説示し奴家は即越後の長尾家の老
夫人殿に身を変じ眷屬百十數個の伴當に打扮して根角谷中に伏を愚まり
輒くあの身を救ふ因縁都てかくの如し然に年来人の死を救ひ數に九百に今
一人の千に満ぬ志願成就の日に折に昔字育まれる和子を救ふ舊恩に報伝
一事両用と欲して伝るかと情に告る長談久話を孝嗣つらく听果て感涙坐に吐
むるに一霊妙時に答ぶるを思ひ〻つ嘆賞して適微妙の法の方便に

かく我総角なりし比親に聞する汝の事なりし。故なく逐電して往方は今に知れずとのみ思ひたりしに。
思ひきやその身は非人異類にて賢人貞女も及ざるべき陰徳善行我與に再生の恩あらんとは。
其由亡母の慈善の餘徳世に復ぬるにあらずやと称へて感謝に堪ざりし。鏡が涯りなり
けり。其の時までも親兵衛は手を支頭を低て黙然として在りけるが。徐に貌を更めて政木狐に
うち向ひて物千載を有ちぬれば神に通して霊あるよし和漢に例多なれば汝が命長きも亦怪むに
足らねども。その身既に一千年の長寿に迨ある霊狐なるは曩に河鯉の家の貴子の下ゆく。
子を産める其比は九百八十許歳なるべし。縦その身は異類なりとも。物老ぬれば經紅竭て有
身る事有るべからんに然もあらざりしはあやしかりきと。詰るを政木は聞あへず。そは宜なる事ながら約莫
天地の清氣に稱ふて長寿を有ちぬるものはその身老て又嬰回り百歳毎に血氣復して。
情慾も亦始に異ならず。さればこそ奴家は連添ふ雄狐の老て死たれば又外より夫贅を將て来
ぬるも十あまり數ふべし。抑狐は陰類にて群居せざるものなり。牝牡と栖るのみ。その故に唐山
ゆゑに文字にも瓜と孤に為れり。狐は即孤の義にて群居ざるのよしを取れり。これらは西晋の学者の贅言
にて我身の與に釋迦に説経孔子に語道を似たるなるべかし。と云ひて吻々とうち笑へば親兵衛屡點
頭て。その義は既にさる事ながら然らば又問試ん。汝の雄狐の死せし比より霊狐の田地に入て推く欲
情を割き慾を禁め慈善を旨とせしといへば。後暗き行ひはあらずべし。然るに河鯉生を救ん
とて。さしも形貌を変化して谷中二们を愚弄せしは是機変の術にあらずや。機変は神佛の悪む所
事に邪魔の入る所以は隠悪機変の応報にて恐慎むべき事なるを。霊狐の所行に似げなからずや
や且汝が河鯉生に贈りたる両刀は原河鯉の什物とも既に没官せられしを情地に奪ひ合りし事ぞ。
其は窃盗の所為に似て快らぬ所あり。その義も亦是故あらん歟と詰れば政木は答へて理論は寔に
さることながら機変も私慾の與にせず或は世の與君父の與に行ひなずることとは況罪なき恩人の枉
し死を救ひ一機変は佛説に云善巧方便孔子の教に直を挙て父は子の為に隠し子も亦父の
為に隠す直き其中に在りといはれしも恩ある奴家が詭計は恩義の與で得る間神佛も與し

あらべし又孝嗣主の両刀ハ実ニ没官せられしにあらず。根角谷中二が私慾に奪ふて収め置たるを。
取復して主ニ返しぬ。そを窃盗の所行に似たりとおもふハ心ニなほ然でも倖言ふ文武兼備て親兵
衛又點頭て耳新しき論弁分明理りあるにぞ。あるべきよ。咱們ハ及ぶも及ばずと誉るを政木を推
禁めて然る宜しき奴家ハ知れり。現身ハ世界ニ十人と並びぬ八犬士の随一人神女の冥助に成長り
奇童ニてあるならバ御身ニ譲ひぬし。折奴家いかにぞ猜しき。然バ現身の性来も天地の間ニ
両箇となく。兄仁字の霊玉あり。凡庸の野狐ならバ非如長寿を有らんとも機向の名玉と見ハぞ。
本形を顕さバ身ニ幸ひよりもあらん。既ニ霊狐の数ニ入りけん。心より毫も邪ならず。是その證據ならず
るなれども。現身の来歴をバ具ニ考ぶりしに方緒ハ不忍の池畔ニて河鯉腹子ニ係りて。現身の
事の顛末と辞示し。あらまし知りて。ひと憑に思ふ悄地ニ安房上総なる城隍土神達を相よ
せて。那里の安否を問試しに又なかなか異変あり。現身ハまだ知らねども。あらまし親兵衛が見を
教ちて。そを何事とも知らず快ら立しね。聞なくばしと問へバ答へく然らバ現身が主君を疑

まで猛可に遊歴の暇を賜ひしハ素より邪魔の所為ぞかし。その故ハ箇様々々と。逆将蟇田素藤ハ
妖尼妙椿が称助をもて。夜館山の城を襲略して。その拆城の頭人なる登桐山八良干ハ生
拘れ。田税戸賀九郎逸時と苫屋八郎景能ハ敵の囲を殺開なく。倶に他郷へ走りし事。是ニ
より里見殿ハ荒川兵庫助清澄を討隊の大将として。館山の城を攻伐せ給ひしに。妙椿が幻
術ニて魔風を起し。寄隊を破りて。浦安牛助友勝を俘ニあする事。這夜女は荒川清
澄ハ埋兵を設けて。夜襲の兇党を殲し。時願八奥利狼之介们を生拘りしに又妙椿が幻
術をもて件の三賊を騙略りし事。その後荒磯南弥六ら安西出来介と悄地ニ謀りて。親兵衛
素藤を刺んとて。敵城に入りて戦殺せし事。その比又里見殿ハ裏ニ土中より埋樁せし
が仁字の玉を清澄ニ貸んとて。寧ニさせ給ひし。舩のとありて玉の在れバ。変ニ始て惑醒て。後
悔の心あり。その比又妙椿ハ稲村の城ニ悄来て。濱路姫を擾擾ひ走り去んとせし。路ニ伏姫の
神霊あり。妙椿を蹴仆し。姫を救ひ。一霎時富山ニ給ひて。妙椿がある妖書の及假名も見が

寃魂の事。親兵衛は一亀も従さるゝ事ゝ那妙椿が幻術とて。里見殿ゝ疑せて。亦事の顛末を具ゝ告ゝ。稲村へ人ゝ遣ゝ。ものゝ里見殿よりと聞ゝ。慚愧後悔大ゝ。蜜崎十二郎照文と蛯雪與四郎とを使として。快親兵衛と召かへて。素藤妙椿とを對治せべく。その折をもて。餘の七犬士の在処をも渉猟せて。共侶を招集聚合んと欲ゝ。評議區々なりけゝ。瀧田の城内にも。亦鶏鵡の奇異あり。老侯那意を猜ゝ。隨即照文と與四郎を稲村の城へ遣ゝ。ものゝ君臣に。便宜を授ゝ。照文と與四郎は君侯の仰を奉り。去向を異ゝ。船路より猛可ゝ起行ゝ。事の趣の餘一事も洩漏ゝ。その崖略を解ゝて。蜜崎蛯雪両個の使价の稲村の城と立去りて。便宜の浦より船出をなけゝ。遠くもあらぬ。昨日の夕べの気色。ゝ。ゝ。と告る詞の委ゝ。辯舌水の流るゝ。疑べくもあらぬ。親兵衛は歎ゝ。憶ぞ勝ゝ拍鳴ゝ。奇ゝ妙ゝ。汝の忠告倘ゝ。の言を聞ざりせば。我は他郷を偏歴して。再叛の賊素藤を討捕る便りなゝ。と思ひけるとゝ。連ゝ稱ゝ已ざりけり。

第百十七回

恩ゝ答ゝ化龍升天を示す
津を向ゝ犬童風濤ゝ悩む

登時犬江親兵衛は孝嗣ゝ。ゝ向ひ。河鯉主今聞れ。ゝ。上總ゝ亦復賊乱ゝ。腹立ゝ。館山ゝ。ゝ。番士們ゝ阿容々々と。果敢ゝ。城ゝ攻陷されゝ。一個は敵ゝ生拘ゝ。両個は逃ゝ。不覚さよ。又歎ゝ。我君のゝ。疑ひを解せられ。急ゝ仁を召へて。又素藤を伐せんと欲ゝ。ゝと聞ゝ。の一條は面目あり。畢竟我身の枉危は。妙椿とゝ。妖尼の幻術より出ゝ。我思慮浅ゝ。今まで悟ゝ。又我犯ゝ。罪ゝ。ゝ。解れて君侯の醒ゝ。伏姫神の宣助ゝ。是ゝ至ゝ。肇て知れり。咱們富山ゝ在ゝ。日は伏姫神の示現ゝ。知ざるこのゝ。ゝ始ゝ劣まる我智を思へば憑むは仁字の霊玉のゝ。裏ゝ自然と土中ゝ出て。我懐ゝ入りけゝ。訴まゝ。ゝ由ゝ。ゝ影護ゝ思ひ。ゝ開も那瓶を發れゝ。無ゝ。ゝと知る。異日禀ゝ解ゝ。證据あり。袷と云造化の黙契妙なゝ。遮莫素藤が復

叛にしと知るもあらべさて已ん今その事を聞くに稲村よりの兄使蛮崎姥雪们が沿逢ぐも
なほ館山ふ赴く。兇徒を送りて討捕るべしまづ戻れば比素藤を恩赦の折柄の要が
意見と演て死刑を落め禀あーふ酒家単その議を否して素藤復叛くことあらば人々い
借らぎ小臣が立地ふ誅戮せべーと禀あーまよりも我君も憑ーく思食けるふ詛語をと人ふいハ
まやせん我も亦始より素藤が復叛んと思いさりーふあらねども饒せまじ逆賊を誅さと
あ残ふ克ん迺主家長久の基を固うせん為ゆえ伏姫神の訓ふ繇れり。斉を世の人い思ひ
あく。君侯いちらへ親兵衛さへ那妖尼ふ方寸と狂される似而非仁政をと今ゆう詰ふも
さぞあらん公们い仁者の真面目をよくも弱あらぬ臆談ふれば歯ふ撰るふ足されども恩と思いで
再叛ー。素藤が悖逆いその罪先度の類ふあらぎ曩ふ那奴と誅せばーい悪木ふとも
花開く梢ふ斧と入ぎる仁者の心再度ふ至く饒ざるい放く山へ還あー虎の人と咲ひーと
屠るふ同じ仁者とふとも刃ふべらぎ縦ぎ素藤先度ふ倍ーく幾千百人肩籠るとも又

活らぎ捉んん。嚢の物を探るより易ふ。和殿一臂の力と勤む義侠の意あるらべ。
卒の人伴ふべ。とふれて孝嗣一議ふ及ぶ。適要ある辨才智勇金王成を言毎ふ感服せ
とふふとろー。小生既ふ知己の資と仰ぎ進退を儘んと欲む火を踏む水ふ没るとも従ざんや。
倶ーめと惴ると政木い推禁め又親兵衛ふ向ひく。南犬江主従ふ兵卒ふらぎ。
身那里ふ到りぬぎ。素藤们い先度ふ懲りて。ぎと出を者らぎ。妙椿い同ぶ。他も亦
霊玉ふ怕れて敵むるといるくとも影を躲ー跡を埋めて風ふ烟の滅るぶ如く忽然とーく逃
亡るべ智勇男も施む所あらぎ。又妖辭ふと送むとあらん。這義を思ひ。と心属れば親
兵衛い答難く沈吟して。現いるれば寔ふ小るる。壁ふ三面六臂ふもあれ目ふぶふる敵ふ
らべ。敷る捕るとのかくもあらぎ。他倘五道の術るどゆとえぎらるべ。爭何いせん斉と禁る術
あらぎやと。問へば政木い點頭て。然べとよそのるれ。才も不才も人い各沿るあり。得ざる事あり
あの故ふ孔子聖人の鋤壊へる技いも。老圃ふ問へと宜へり。あん身ふ助言い烏許るぶ。

龍の路い蛇ーを知〜め那妙椿が幻術を破りて捕捕まく欲せば先他が来歴出処を具ふ知ぎいあるべ〜ぎとふ親兵衛欲びく。そを亦沼〜ぬ珎説ゐ〜ん快く听まく欲ーけれと忘て膝を找れば孝嗣も亦うち合笑れて俱ふ耳をそ傾ける。登時政茶の盞を低めて。然〜ば又一條の昔話をまとべ〜ん大江主膳より偽ゆあひ〜と思ひ合ーのふうも佞〜き。抑安房國長挾郡富山の麓より程遠ゐ〜ぬ村落ふ犬懸と唤ぶ寒村ありその村這名を沼ざりー以前文安四年。丁卯の秋伏姫七歳ふゐるのあひ比件の村ふ貪ーぬ民の字を枝平と唤ゐ〜ふ。年来畜ける牝狗ありけり。這秋その狗児子を産けるふ只一隻子ゆ〜牡狗ん生れていまゞ幾日も歴ざりー。有一宵その母狗い狼ふ咬れてけり。雛狗いのまゞ目だふ開ゐぐ。蒙〜ゐる比れい養ふべくもあ〜ぢりーふ奇ーぬい夜〜毎ふ牝狸の富山の方より出て来て乳をそ雛狗と孚ーゐ餓も死ざるとぬて最大ぬ〜ゐりー時。この事ゆえて瀧田へ徙れ義実主ふ寵養せ〜れ。八房の犬即是ゐ。去ゐ件の八房ん毒婦玉梓が後身ゐ

ぬ。里見ふ害あるのゐりー。役行者の利益ゆ〜。玉梓が悪ゆ火終ふ解脱ー八房の犬も亦伏姫讀經の功徳ふよりそ。俱ふ菩提ふ入るめ〜ゐ。初八房の犬と孚ゐる狸児ゆも亦玉梓の餘怨貫縁りてりけゐ。是のゐらまゞ得脱ぎ。今も里見殿を怨ゆ〜ゐ。当初義実主八房の犬と見ゐ〜ゐ。折狸児の乳をりく養れゐ。事怪〜と听ゐ〜て字書ふ狸い犬ふ従ひ里ふ従ふ者ゐれ。ゐゐ是里見の犬ゐべ。因縁ありと宣ひふ只犬とのゐ鍾愛ーそ。狸の事い竟ふ問れぎ。狸児い亦その功をりそ。狐のごく禿祠を造り〜。祭らるえと思ひふ然ゐ沈ゐれば喫醋ふ堪ぎ。安〜富山を立去りて上總國夷灣郡普善村ふ程遠ゐ〜ぬ諏訪の神の社頭ゐ。老樟樹の梼ふ栖ひく。那里ふ在ること三十餘年便宜ゆ〜ゐ國主御父子ふ出崇を做さえと思ひ〜ハ王梓が餘怨ふ惹ゐ。是宿因の悪心ゐりぬ。恁而墓田素藤が両個の愛妾を喪ひく。哀慕鑿悒ふ堪ざりー折他いその虚ふ漏入ゐ〜。八百比丘尼の綽號を冒ーく。妙椿とのふ女僧ふ変化ー遂ふ素藤を哄誘ーくゐ非

光[illegible]の分の婚姻整ひぬ。素藤酷く國王を恨みて。叛逆龍城両度に亘ぶ支今日に迫まるを。
忘れず初妙椿狸児。神女の威靈を憚りて。軍陣に莅ざりしに素藤們を死を饒さ
ざる。遠く追放せられ。後妙椿に忘れも亦我妙椿りて義成主と大江の胸を狂し素藤
們を殺ひなんど。実に恐ろしき説誘りしと。素藤們いはもありけめと思ひ惑ふて國主にゆるしを
身の慈善を因忍とせず。吭下過ぐる熟れ徴ぶる。所い小人の本性なり。國の安危を定るを
最も大事の所行なるに。良将勇士がなるに。胆竟と妖怪に奪ふるよりあるべきか。君子
とい欺くべし。陷るべきとも。恐るるを知らざるんと。奴家に思ひ侮るかし。然ば又妙椿に那反間の
邪術をなすべし。身を他郷に退けしより。敢又憚らざる。兇徒の軍師を做りて。寄隊を破
るに風を起して沙を飛し。樹を覆すその勢ひ當るべきに。嘯く虎より烈しかりしに是に亦
然る所以あり。他に甕尾龍袞の玉を持りその玉に貉の腹より顕れ出る宝貝を上古垂仁天皇の
ん時丹波國来田郡の人と云へり。甕尾龍袞が家に飼ける犬の名を足往と吸ふ。

這犬一日貉を見て立地に噬殺せり。その貉の腹内に八尺瓊の勾玉ありけり。甕尾龍袞その
ことを訴禀して玉を朝廷に献ずるに。這玉今に石上の神宮にありと云へり。書紀垂仁紀に載
られる。垂仁帝の御時より。今後土御門院の文明十五年に至て。千二百許年。世に戰國に乱れ悲しき
倭の珍奇の神宝も馬蹄の塵に埋まれて。有と知る人稀なり。妙椿狸児が見出て
只顧愛玩秘藏せり。初甕尾龍袞が垂仁帝に獻りける東西なれば名づけて甕尾龍袞の玉と
貉と狸い等類ゆえ。穴居して雨を避け。よく風を知る者なれば昔も今もその皮を鍛冶の
吹革に用ひる。風を出すその理なりとて。妙椿件の玉を呑て。呪文を唱て勁風を起すに極めて效
験あり。遊莫那身い貉に等しき狸児で侮るまじ。と云へれて足往の犬に殺されけり。貉の腹
より出し玉なり。賊徒と資け。寄隊を破る宝貝に寄ふ。兆
るを悟らざる。愚に嗚呼の所行なり。然ば狸児にその智浅くて。野狐に及ばざるを是なるに由て知
られ侍り。如身他を對治せるに。件の玉を獲ざる。後に必用ることもあるべき。等閑なるまじ。そこに妙椿

文政堂藏

ゞ来歴出処の崖畧を伺ふに扨又舘山の城より入るゝ初の度とは同じかゝれど非如ゐ身の武勇とゝ〳〵素藤们い緝捕易くとも〻ゑ妙椿ゝ知られて他を走る〻ゑ爭何いせん怎れば敵ゝ知るゝもぞ〻悄入るゝ妙椿ゝ走べ。その折悄入るゝ地方い舘山の城の副門ゝ固様〻〻の目標あり其処い昔の城主が地道を穿ち造為る一條の脱路ゝ後ゝ千曳の石をとゞめて前後の口を塞ぐゝ今い開と知れる人罕ゝ身が萬夫の膂力あるも合除くゝ容易かゝゝ其首より入るゝんと欲する折固様〻〻ゝ做ゆゑゝ豪毛も筋力を用ゆゝ必入極めて隨意ゝ〻ん先後堂ゝ赴て妙椿狸見ゝ撞見ゝゆゝ力をゝく征ゝ〻ゝゝの折ゝ箇様〻〻怎ゝゝ做ゝゆゝ妙椿が邪術忽地ゝ破れて他が腹心ゝ黄縁らる玉梓が餘寃解脱せん然ゝとゝ妙椿が摠身朽木の倒るゝ像く本形をあらゝ表べ。則是玉梓が臨終の悪念塵も住めぞ。煙の似く滅亡て後々までも出るゝ見えの證据をんか。併役行者の利益ゝ憑れるゝもあらんゝ冥助を仰ぐべゝ。その餘のゝい告ぞともゐん身の智計武勇ゝ〻功あらんと疑ひゝど

ゞ〻親兵衛ゝ聞て且感ゝ且驚ゝ勇氣日屠ゝ弥増る。腕を憶ぞ扼ゝ是ゝゝ〻ゝ有縁の忠告ゝ〻ゝ機を査ゝ隠微を明ぞ言皆意表ゝ出るを聞く我身ゝ今富山ゝ在て伏姫神の示現教諭を兼るゝ異るゝぞ。老媼ゝ素ゝ是異類とゝゝもその知賢大菩薩ゝぞ。ゝゝ趣ゝ〻ゝゝ誰て明教ゝ従ざんゝ後べ。とゝゝ又孝嗣も政木の老媼ゝ向ゝ具る敵地の安ゝ内側聞ぜ我も亦大江主ゝ従ゝ千里を走る蒼蠅の驥尾ゝ附くす功あゝゝ又かり来て慰ゝ雪辱少の程ぞ。ゝゝゝ政木ゝ守ゝ主本ゝゝ奴家ゝ年来の陰徳の功課ゝゝ〻ゝ天帝の恩敎を兼りけゝゝ狐龍ゝ做り伝れゝ今升天ゝ〻ゝ下界ゝ在ゝぞ。遇ゝを別の時を待れと告るゝ孝嗣ゝ〻ゝ什麼狐龍とゝ何ぞのゝぞ狐も龍ゝ做らるゝゝと問ゝゝ又親兵衛も俱ゝ眉根を〻ゝ顰めゝ我聞く龍ゝ神物ゝ和漢今昔世の人々その名を知れゝ形を見ぞ然るゝ唐山の史傳ゝ昔豢龍氏が龍を屠り后羿龍を射るの説ゝ見ゝて抱朴子ゝ蛇龍とゝ一種ゝ蛇も千載を歴るゝゝ化て龍ゝ做るとゝれ

と陸佃が埤雅その非を辨ぜり。龍いかづち龍に化して蛟へ化して倣れる真龍をも
また并に亦稱て龍といふ。僻言ゆゑ[illegible]因て我仁按ずるに[illegible]の人の龍といひ素より是一
物なれども星と龍と馬も亦龍と稱し蛟虫蛇蜥蜴をいふ。徒れば種類多けれども真の龍と
もゝ[illegible]真の龍とは[illegible]蓋星氣ともいふ。疾雷。勿論形狀ありて。飲食するものなれば天地陰
陽二氣の升降。雲と起り雨と降り。春見れて冬蟄す。是を名づけて龍と云。和名抄豆豆と
起の義ゆゑ二氣の發起を取れるゆゑ。然るに世に龍といふは蛟虬蛇蜥蜴などの種類
のゆゑ。真の龍はあらざるべし。あれども蛟虫蝮蛇の老たるい形狀画る龍に似たり。是れら真れ
龍をねども化して龍に倣ふとも。據るべきなし。狐いその類なるゆゑ化して龍に[illegible]説い
酒家寡聞まゝ[illegible]知らず。其教ゆまほしと問へば政木は點頭て現真龍のあん説い
古人未發の明辨也。学者の惑を醒ぶ足れり。奴家ども龍といふ名は同うして物異へ
真の龍にあらねども陰陽二氣に從ふて雲を召び雨を行る然るゆゑの能はあり。然るゆゑ狐は

その形狀毫も龍に似ざれば。狐龍の説を疑ひ憚りなく親を信て疎に非とあ
まかりなるべき。辟言ば田鼠と如鳥とは。禽獸の差別ありて。狀も大く異なれども。田鼠化して如鳥なる
ると。月令にえたり。又朽高木と螢火とは。非情有情の差別あり。形の似るべくもあらざれど。腐
草化して螢になるゆゑ。狐龍も亦これと同じ。證文あるを讀むべし。狹島許多べけれど。聞ひ
たる徐ふるに咳死て按ずるに。奇事記に曰。驪山の下に一白狐有て。常に山下を驚撓せり。人
祛除て能ざりしに。唐の乾符の年。其白狐忽一日温泉に浴て自浴するに。須臾の間に
雲蒸し霧漏て。狐は則白龍に化して天に升て去りぬ。後に陰晴なく。折山本の人
白龍の山畔を飛騰るを見たりけり。如此る事三年わたりて。忽一老父あり。臨夜毎に山の
前に哭けり。人伺て故を問へば。老父答へ。我狐龍死ぬ。故に哭く。亦とふ。何を狐
龍とふや。老父は亦何の故に夜毎に出て哭くやと。問へば老父答へ。狐龍はこの身狐なり。
化して龍に成りぬるの。化して三年にして必死。我は狐龍の子。とふ。その人又問て。狐る何

どて能化しく。龍ゐられるやとい〳〵。老父答て此狐い西方の生氣と稟て生れり因て全身白色
ゐり。衆と遊ぶに近處の狐と居るに驪山の下ゐ託もると千餘年後ゐ偶雌龍と合ゐり。上
天これを知りく遂ゐ命して龍ゐ為せり。亦猶人間の凡夫より聖人ゐ成るごとき耳と言訖て滅
ゐと諳記の隨誦する聲清亮ゐしく跌るに理義分明ゐ堪えけり。

作者曰狐龍の事い格致鏡原卷の八十八獸類狐怪の部ゐ又奇事記と援て
ゐれと載せり。作者の倣り設けしゐるに昔より和漢の博士龍を辨まる者多れども
〳〵狐龍ゐ及ぶと見ず故ゐ多く借用ず看官原文を知るもゆゑ亦復これと合し見るべし。
登時大江親兵衛い孝嗣と共伯ゐはらくと听果く。且羞且歎びと政木の老媼ゐ演く
ゐやう。賢者い二字の師をゐゐ弓閑ゐ思ふとゐ。汝い素ゐ是異類ゐしく。博識視聽を
驚せり。我より及ぶ所ゐあらぬ。ゆゑゐ又逢ゐ甘ゐあべ。詞敵ゐせまくほしゐ。今遇ゐて今別
れ別れく遇よりゆと守く薄縁とそと慨しけれと不娛れば俱ゐ孝嗣ゐ愀然と嗟歎

ゐて昔い妖母假ゐゐ主從けゐい又我再生の因ゐ人とのみ思ひゐるその歎びゐゐよりゐ盡
くさぐ盡る値遇の縁留め難く哀別の涙の雨ゐ雲を刃ぶ龍ゐその身を做し果く千
尋底成ず大洋ゐ潛ゐゐ後長らく命三稔ゐ終るまで尚忘れぬい春秋の折々毎ゐ
訪來ゐし悲しく紀ゐ。とうち歎けば政木いゐと慰難く。一霎時目水ゐ洗衣の袖と斂
めて孫よ喃和子女々し紀とる宜ひそ非如奴家い在しぬゐ。大江主ゐ從ゐて爲七個の
俊傑と友垣結び幇助ゐ為く。仁義德澤世ゐ稀る那明君ゐ仕へゐひゐ名我竹
薄ゐ誌されゐゆゑび家ゐ與しゐん今よりて三稔の後上總國夷灘郡雜色村ゐ石
降りく石の形い蟠る龍ゐ似るを見ゐば。我成る果と知りゐ願ゐい大江親兵衛
主儘しまれる和子の上直紀ゐ過ぎく向胆の心足らぬい幾番ゐ叱り懲らしと杖とる
看ゐもるりて武夫の方ゐ道ゐ紀ゐひゐかし。今い時來ゐ名殘惜しけゐとぞる外面へ走り
出しく松枝ゐるを拽け閃りと立狹と見れば蚩鳥の似く身を翔らしく。程近く來不刃心の

池水を巻騰
異龍洪
雨を降す

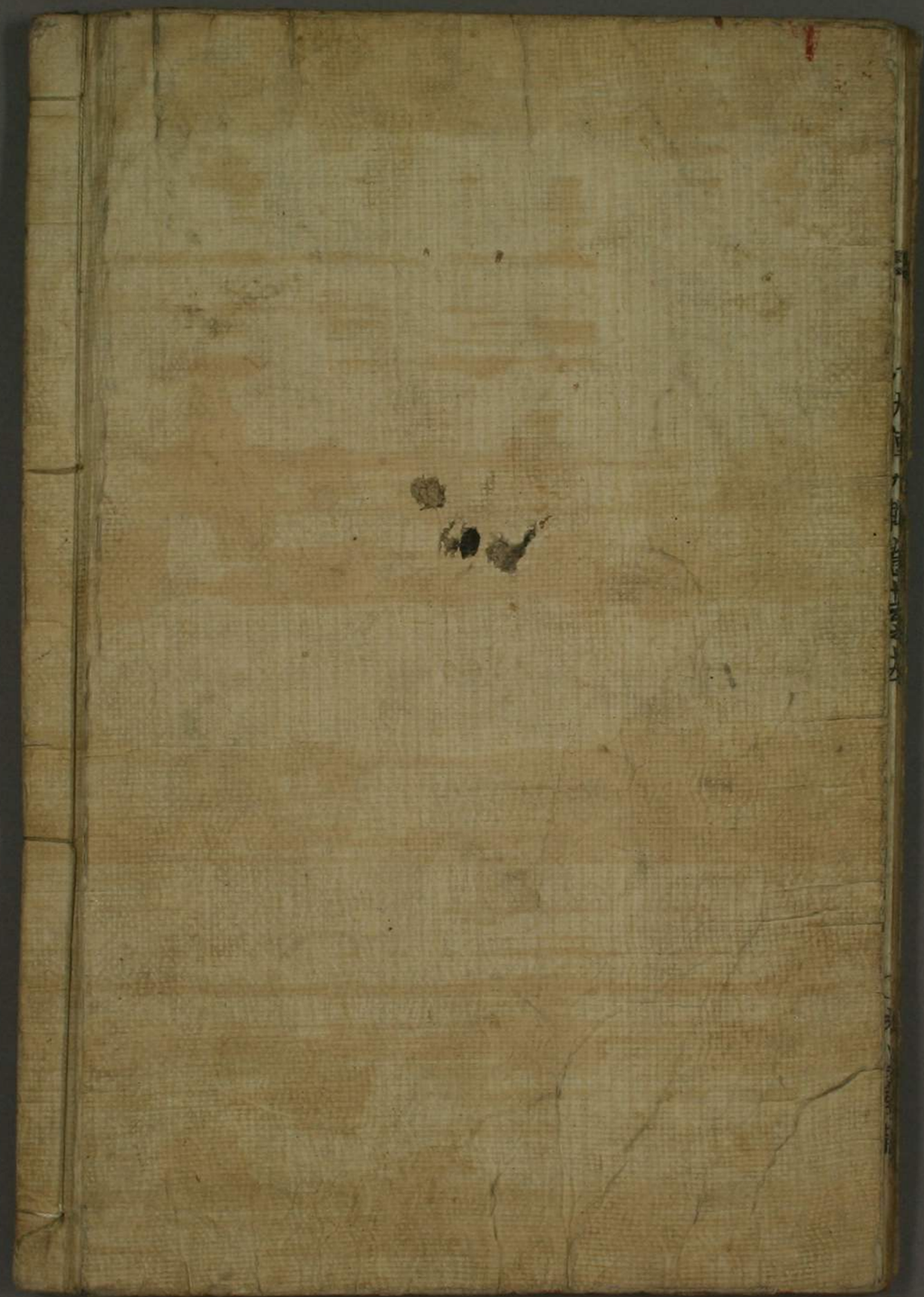
政木茶店親兵衛復與孝嗣憩

池へ夾と跳入りけり時に雲湧き雨降そゝぎ動風天地を裏して黒白を別ち震動
雷電常間に似るそゞ中に龍火の光を向上れば白龍雲間に顯れて首を伸つ尾を
垂れつ巻き騰る池水の雨とゝもに疾き勢ひに蓮葉断離れ細鱗放下さゝて
足下に踊るも夢ならけり去の折親兵衛と孝嗣い狂風暴雨に老媼が茶店の葭簀
発児茶器まくも東西一箇もなく吹攫れく雨を避るに術なければ松の樹蔭に身を
倚せて俱に雫なるを待つに奇しきは最も劇しき大雨の只這松の四下の三一滴だも降
ざりけれ幸ひに濡もせず衣も濕吹氣を受されども亦狐龍のなしありての呼ばるる
べしと感嘆まつ雙立く在りける程に姑且しく雲斂り雨歇て風雷餘波なほ長
き四月の天晴亘て夕陽西に尚残れり然ば親兵衛も孝嗣も狐龍の奇特に疑ひ釋て
迭に他が噂をまつ路の乾くと等程に親兵衛傍なるを呼て嘱河鯉生剛才化龍の升
天を覩て思合せる事ありしは昔年嘉吉の間戰破れて結城の城郭没落の折我老

侯義實朝臣當時は尚弱冠なれども里見又太郎と呼れしが送訓に従ひ九死を免れ
氏元貞幼主従三騎安房を投て走りぬ程に落城より第三日の黄昏時侯相模
国御浦郡箭採の浦に船を討めて津を急ぎ折白龍海底より顯れ出て南を
去く騰り去れり恁る祥瑞あれば義実安房に赴きぬ幾日もあらずして神
餘が與に義兵を聚合て逆臣山下定包を誅戮しその後朝夷郡平館なる麻呂小五
郎兵衛信時が約に背きを討夷げ最後に安房郡舘山の城主なる安西景連と戰
克て景連頭顱を授けしより義実安房を平均しく四郡の主になりぬ是這一條の
舊話は酒家富山に在りし時伏姫神の示現によりて粗知ることなるべし有恁に今
我們は孝嗣和殿に舊縁ある狐龍の升天を目擊きをり且その龍を辨論あけぬも
新舊君臣一致のあど且義実朝臣の笠前採の浦なく龍の升天をえぬ吉兆吉元
年四月十八日のなと狭少ぬ又我們が狐龍を見しは今日文明十五年四月中の二日なり

その日の聊違へども共に中旬をその月の皇同じ支の暗合是のごとく昔年我老侯の討滅
ありしかけ安西三郎大夫景連の安房の館山の城主なりし今の愚臣犬江親兵衛が討
果さんく欲し号叛賊蟇田素藤の上総國夷瀦の館山の城に在り安房と上總
と異なれども共に館山と唱へ做したる城の名も亦同じ裕と思ひ恰をあひの造化の照對あふ
似たり事吉兆とぞ思へば欲西國河まで快退けく船を央て上總へ渡さん和殿の意見
甚麼そやと問へば孝嗣再説に及ばず所くぐとの前後同瑞討論合考寔によりあり這
回も大功疑ひなし卒ゆへ俱にそんとく東を投じて立出ける小程に大江親兵衛が孝
嗣を相伴ふて西國河原へ赴く程に那里の兩の岸ざうける狭大地の乾る隨ひて歩の
運びに障りなければ思ひよりもなく來れば故ら日長し四月の天の暮んとして暮に躰て
這西國河の岸邊なる船公の宿所の呼門して低々と相譚ふに船公答へく上總へいかんと
欲りしゆゑ只今の風も亦潮も亦宜しく意ふに這真夜半に必追風ふるし波の

上のゆゑも船で世渡る我們をう自由なゆゑ常なれば急うとて爭何はせんもとかくうで
奥に坐席あり那里で甘坐ゆとの早の商量敷年ゆゑ親兵衛心焦燥て外に船公をうで
やと思へば躰て立去くく又孝嗣と共伴に便宜の出船を素ふに皆いくくと相似たり困て果た
亦初の長ど宿所へかうでく漁村の柿風に靡いて蓑衣乾す門の夕日影苫屋の煙天に
滅くく友呼ぶ鷗浪に浴す或に葦葭の戰ぐ処魚と踏む白鷺見れ一葉繫ぎ械の頭
に羽を曝す鵜鴟在り長汀弓の像く入江に續く浮洲前に似る水澪建り仰ぎて西
南を眺ぶに夏の富士いまぞ粧を更めぞ遥に東北を省れば遐卒の筑波尚霞殿を残せり
武総両國の都會に有れば海舶多く猫を卸し商魚那這に軒を比べ世渡り易く福
地に成あり故ぶ然べ又這河邊に三觀鼻と唱做す出崎あり什麼何なる由来ぞ這名
あるやと原るに看官知られる所あり約莫這水際に翹て視るとぞ右に富士左に筑波前面に
葛西の曠野はて杳渺として障るものなく只一覽ぞ三箇の眺望あり因て土人字して三

觀鼻と唱へり。鼻ハ即方言ニ。猶出崎とゐふごと。然ばその出崎ハ千里鏡を貸ス茶店あり。飯と酒と鬻く小店もあり。邊鄙ニ似げなく熟鬧ひる。折ふし人許ヨリ立聚合て。蟻児の甘紀ハ附くゞ像。親兵衛と孝嗣ハ今這出崎を過る程ハ開ニ那ゐやと訝ハ心ともなく立寄て。稠人を掻分紀ハ。找ニ近つ紀くよく見るハ主僕とおぼし紀老壮両個似而非技ゞて人を幸せとさゝく膏茶を賣まく欲りまる逆旅経紀人ニそありけるそゞ中ハ年齢六十だりまるらんとゐ。東人ニそ。年歳二十有餘ゐるハ従者ゐるべ。主僕倶ハ遠山形ゐる深木綿の夾衣どうち披りて帶をせず。白栲の犢鼻褌と高く緊ゝ引結びて跣足ニて雙立さるゞ。地ハ畫ゝ土苞ハ像りそゞ偽ハ天朝捕刀鼻祖野見宿祢家秘神方。撲傷折指捐痍妙薬荻野上風相傳精製と。ハ二十言と寫ゝる幟形ゐる操紙の招牌を真砂地ハ推植て。高ハ寄來ル人をまち。畢竟這逆旅経紀人恁地ハ人を稠ゝ甚ゐる技を做ニ。あんそハ次の回ハ解分ると聽ねかし。

南總里見八犬傳卷十三之十四終